キャンパスの四季　Four Seasons in SHC　(No.64)　2016/06/20

＜梅雨＞植物、農作物にとって無くてはならない時期とはいえ鬱陶しい日が続きます。富士が頂上まですっきりと見えた日は久しくありません。近くの丹沢も雲と霧がかかり水墨画の景色です。ところで昔は”梅雨(つゆ)”でなく”五月雨(さみだれ)(陰暦５月が今の６月)”、この方がじめじめとした感がないですね。「五月雨を集めてはやし最上川(芭蕉)」、勇壮です。”五月晴れ”という言葉も梅雨のあい間の”晴れ”というのがもともとですが、今の５月、鯉のぼりの泳ぐ青空を思い浮かべたいですね。

＜梅の実と？＞”梅雨(ばいう)”は中国渡来の言葉ですが、まさに梅の実が熟す時期の長雨です。キャンパスでもいろんな梅が植わっていて毎年大小さまざまな実を付けます。”枝垂れ梅“も数は少ないのですが立派な実を付けていました。ところで大粒の梅をひと回り大きくしたようなものが”イスノキ”に付いています。果実ではなくアブラムシの仲間が作った虫こぶです。今はまだ固くないのですがそのうち小さな穴が開きカチカチの茶色の”ひょんの実”(No.28 参照)になるでしょう。

＜枝垂れ梅の実＞

＜イスノキの虫こぶ＞

＜妖精たち＞梅雨空の下に良いこともあります。雑木林の縁辺で”キヌガサタケ”を見つけました。真っ白なレースのスカートにグレーの帽子を被っています。野辺ではアゲハチョウ、キチョウ、シロチョウ、ジャノメチョウそしてシジミチョウたちが忙しく飛び廻っています。写真は”ヒメジョオン”の花で翅を休める”ベニシジミ”です。

＜キヌガサタケ＞

＜ヒメジョオンとベニシジミ＞

＜晴れ間に＞アリは本当に働き者ですね。常日頃、見慣れた昆虫ですが梅雨の晴れ間にここぞとばかりに活動しています。一匹の”クロオオアリ”が身長の５倍ほどもあるバッタ(?) の翅を咥えて右往左往していましたが、助っ人がやって来て巣に無事運び入れました(左写真)。見事な連携プレーです。一方、草の間でのんびりと遊んでいる様子の大きな動物を見かけました。同じ場所に姿を現す”タヌキ”です(右写真)。草陰になって見えませんがカエルかヘビを相手にしているのでしょうか、犬と同じように挑んでは身を引く仕草を繰り返していました。(文と写真：松本正勝)